子どものルール場面における行動・情動の理解の発達

「お母さん悲しい」を聞くと子どもは言うことをききたい気持ちになるのか？

○鈴木裕賀

(埼玉大学大学院教育学研究科)

キーワード：情動，欲求，ルール

Children's understanding of behaviors and emotions in rule situations.

Yuka Suzuki

(Graduate School of Education, Saitama Univ.)

Key Words: emotion, desire, rule

【目 的】

子どもは日常生活で頻繁に母親からルールを言われ、それに従ったり、従わなかったりする。子どもは、人はそのようなときどのような情動を持つと理解するのか。Lgattuta (2005) は、主人公の欲求と母親の言うルールが対立する場面で主人公が従った後、従わなかった後の主人公の情動を4、5、7歳、大人に尋ね、4、5歳は7歳、大人と同様に従うことに良い情動、違反した後に嫌な情動を感じるが（ルール志向）、7歳児や大人はそれに加え、違反に良い情動、従うことに嫌な情動も同時に感じると予測することを明らかにしている。しかし、Lagattuta (2005) では情動予測の質問の際に良い情動か嫌な情動しか提示せず、どちらでもない情動を予測する場合を考慮していない。また、日本は海外に比べ、母親が子どもにルールを教えるときに情動を言う（例：〇〇したらお母さん悲しい）という特徴がある（東，1994）。よって、ルールを言うときに母親の情動を伝えた場合は、伝えない場合に比べて、従うことに良く感じ、従わないことに嫌に感じると予測すると考えられる。したがって、本研究では、どちらでもない情動を提示し、さらに、ルールを言うときに母親の情動を伝える条件と伝えない条件を設定し、比較することを目的とする。

【方 法】

参加児：年中児30名、小学校1年生24名の合計54名。

要因計画：年齢×母親の情動の有無×終わりの行動（従う・従わない）。終わりの行動のみ被験者内要因である。

課題で使用する物語：主人公の欲求とルールが対立する（例：道路に転がったボールを取りに行きたいが、取りに行くのは良くないと母親に言われる）物語8つをランダムに提示した。母親の情動ありの条件は、母親がルールを言った後「〇〇したらお母さん悲しい」と言った。

課題の手続き・得点化：1. **行動あり課題**：上記の物語提示後、物語の内容を理解したのかを確認するために内容について質問し、そして主人公が母親の言うことに従った物語2場面（終わりの行動：従う）、従わなかった物語2場面（終わりの行動：従わない）を提示した。その後、「主人公はこの後どんな気持ちになるか？」（情動質問）、「それはなぜか？」を尋ねた。情動質問は情動を示す顔（とても嫌、少し嫌、どちらでもない、少し良い、とても良い）のカードを提示し、選択してもらった。各場面の情動質問でとても嫌～とても良いを1～5点で得点化し情動得点とした。2場面を合計したため得点範囲は2～10点であった。2. **行動なし課題**：最後の物語のみ、従う・従わないの終わりの行動を示さない場면을提示した。その後、確認質問を行い、「この後主人公はどう思うか？」を尋ね（行動質問）、行動あり課題と同様、情動質問、理由質問を行った。行動質問の回答は「従う」「従わない」に分類した。

【結 果】

年齢×母親の情動の有無×終わりの行動の分散分析を行った（図1）。その結果、終わりの行動の主効果が有意で（ $F(1, 50) = 52.72, p < .01$ ）、従った後より従わなかった後で良い情動

を感じると予測した。また、学年×終わりの行動の交互作用が有意で（ $F(1, 50) = 13.31, p < .01$ ）、従わなかった後は年中より小1で良い情動を感じるという予測した。さらに、予測の志向タイプを見るために、従う2場面で良い情動、違反2場面で嫌な情動を選択した場合をルール志向、その逆を欲求志向、それ以外をその他として分類した。学年別に志向タイプ×母親の情動の χ^2 分析を行った結果、年中児で母親の情動の有無により志向タイプの偏りには有意な傾向があり（ $\chi^2(2) = 6.00, p < .10$ ）、残差分析の結果、情動あり条件でルール志向が多い傾向があった。さらに、学年により行動予測が異なるかを調べるため、学年×行動予測の χ^2 分析を行った結果、情動なし条件で有意傾向であり（ $\chi^2(2) = 4.70, p < .05$ ）、残差分析の結果、年中より小1で従うと予測した子どもが多かった。

図1 ルールに従った後・従わなかった後の情動予測

【考 察】

情動得点に関して、母親の情動の有無の条件間で差が見られなかったが、年中児の情動あり条件でルール志向が増えたことから、母親の情動は年中児にはルール志向を促す要因となりうることを示唆された。また、本研究では、Lagattuta (2005) と異なり、母親の情動なし条件で年中、小1ともルールに従うと嫌な情動、従わないと良い情動を持つと予測し、欲求志向であることが示された。さらに、この傾向は年中児より小1で強いことが示唆された。しかし、行動予測では年中より小1で従うという予測が多く、行動レベルでは「ルール場面では従う」という認識が発達していると言える。情動予測の際、年中に比べ小1で「どちらでもない」という情動を選択する子どもが多く、予測理由を尋ねた際に迷っている様子が見られたことから、行動に比べ情動レベルではまだルール志向には達しておらず、2年生以降に発達していく可能性が示唆された。

【引用文献】

東 洋 (1994). 日本人のしつけと教育—発達の日米比較に
もとづいて 東京大学出版 pp. 98-108.

Lagattuta, K. H. (2005). When you shouldn't do what you want to do: young children's understanding of desires, rules, and emotions. *Child Development*, 76, 713-733.